

若きリルケとゲーテ

—愛と彷徨のゼマンティック—

黒 子 康 弘

はじめに

リルケとゲーテの詩人としての活動時期はおおよそ一世紀離れている。現代の感覚では大変大きな懸隔である。しかしリルケに対するゲーテの影響は一般に考えられているように些細なものとは言えない。本論では、リルケの詩人としての成長を明らかにする上で、ゲーテが決定的なトポスを形作っていることを示したい。果たしてどのような意味で決定的であるのか。『マルテの手記』を手掛かりに両詩人の連関を追究する。

I. アベローネとの約束

リルケ研究者であれば誰もが認める論点というものがある。パリ時代のボードレール、ロダン、セザンヌへの関心がそうである。これらはリルケの詩作に明確に痕跡を残しているためとても扱いやすい。一方、この時期のリルケとゲーテの連関については、正面から論究されることは極めてまれである。それはリルケがゲーテに対して自己韜晦とも言える態度で臨んでいるため、ことの真相が見えにくくなっているためと思われる。この時期のゲーテとの関係でよく言及されるのは、『マルテの手記』の次の一節である。

君自身、君の愛の価値を良く知っていた。君は君の最も偉大な詩人に声高にその愛を語った。それを人間的なものに変えてもらうために。というのも、君の愛はまだ自然力（Element）であったからである。しかし、詩人は君に書いた返事で、君の愛を人々の目からそらしたのであった。誰もがその返事を読み、詩人の言い分を信用した。人々にとっては自然よりも詩人の方が目につきやすかったからである。しかし、いつの日かここに詩人の限界があったことが明らかになるであろう。この愛する女は詩人に負わせられた義務であったが、彼はそれを果たすことができなかった。¹⁾

ここでいう「偉大な詩人」はゲーテ、「愛する女」はロマン派の詩人クレメンス・ブレンターノの妹エリーザベトのことを指している。二人が知り合ったのは1807年、ゲーテ58歳、エリーザ

ベト22歳のときであった。²⁾後にグリム童話（正式名『子供と家庭のメルヒェン』³⁾初版の献辞へとその名を残すことにもなる、多感で情熱的な才女ベッティーネは、オリュンポスの大詩人に熱烈な手紙を書き送り、ゲーテがそれに対して返事をするという関係が続いた。二人の交流が世に知られるようになったのは、ゲーテの死後1835年に出版された『ある子供とゲーテの文通』⁴⁾によってである。そして出版から約70年後にリルケはこの書を偶然見出し⁵⁾、ゲーテがベッティーネの愛に対して概して冷淡であり、「詩人に負わせられた義務」としてまともに取り組んでいないことに不信感を懷いた。その疑念は、現実と虚構の敷居を超えて、『マルテの手記』の創作へと流れ込み、愛について思考する主人公マルテの言葉として吐露されることになったわけである。

小説の中で主人公マルテがベッティーネの手紙に出会う経緯は、おおよそ以下のようなものである。マルテは、未婚の大人の女性アベローネに淡い恋心のような想いを寄せている。ところがしばらく前から猛烈な読書熱に浮かされていて、彼女と一緒に過ごしているときでも本の世界に入り込むようになった。ちょうど思春期のマルテは、意地を張ってアベローネとわざと気まずい雰囲気の中に身を置いて、仲直りの喜びを大きくするために仲たがいの状況をできるだけ引き延ばそうという、身勝手な空想までしていた。ところが突然読書熱は終わり、アベローネに呆れられる。時は7月、マルテの意識は本の世界から、生命が躍動する美しい季節に移ったのである。マルテは何気ないアベローネの仕草に美しい季節が反映しているように思い、ふと見とれそうになる。そのことを悟られないように、すぐそばに置かれていた本を取り上げ、書名も確認せずに無造作に開くと、無言で読書している風を装った。大人のアベローネは、どうせ読むなら声を出して聞かせてと朗読を促すのだが、それがベッティーネの手紙だったのである。

マルテの朗読はうわの空であり要領を得ない。朗読は不意にアベローネによって遮られる。「いいえ、返事の方は読まないのよ」。⁶⁾マルテはちょうどベッティーネの手紙の一つを読み終えたところであった。したがって、「返事」とはゲーテの手紙である。アベローネはゲーテの手紙がマルテによって朗読されることを嫌い、制止したのである。その時ようやくマルテはその本が何であったか明確に意識した。マルテから本を受け取ると、アベローネはベッティーネの別の手紙を読み始めた。朗読は勢いその調子を高め、じきに歌を歌うようになり、マルテは次のように考えさせられることになる。

僕は2人の融和を取るに足りないものと考えていたことを恥じた。なぜなら、それこそが僕たちの融和だったと感じたからであった。しかし融和は、僕より高い次元の、僕には手の届かない、どこかきわめて大きな世界で成立したのであった。⁷⁾

少年のマルテは、アベローネにどこか肉親を思うような感情を懷いていたに違いない。それが淡い恋心というフィクションによって仮装されていたとも考えられる。そのようなマルテにとって、アベローネとの融和は、その気になりさえすれば簡単だと思われていた。しかし、アベローネにとってはそうではなかったのである。アベローネがマルテに対して肉親を思うような穏やかな感情を懷いていなかったからというわけではない。悲恋の経験を持つアベローネは、その感情とは別に、遙か彼方を見つめていたのである。マルテと自分自身という現実の彼方である。そこ

は、かつてゲーテとベッティーネも身を置いたこともある、男と女のすれ違い、あるいは永遠に折り合えないかのような抗争の演じられる場であった。そこでの男と女は、マルテによれば次のように特徴づけられる。

運命は模様と図形を考案することを好む。運命の難しさはその複雑さにある。しかし生命そのものは単純さのために難解なのだ。生命は我々の尺度を絶する大いなるものを2つ3つ持つのみである。聖者は神に向き合い、運命を拒むことによって、これら2・3のものを選択する。女も生まれつき、男との関係で同じ選択をせずにはいられない。そのことがあらゆる愛情関係に不幸をもたらすのである。決然と、運命を知らずに、まるで永遠であるかのように、変転する男の傍らに女は立つ。そして生命は運命よりも大きいために、愛する女はつねに愛される男を超えてゆくのである。⁸⁾

運命に翻弄され変化し続ける男に対して、女は運命による変化を拒み、生命という永遠の相に生きる。どちらもそれぞれの困難を抱えているが、その質と尺度（大きさ）が全く違うとされる。根本的に尺度も存在様態も異なる両性の融和は、果たして少年のマルテが軽率に信じ込んでいたように、容易に達せられるものではあり得なかったのである。アベローネはベッティーネの手紙を読み聞かせることで、マルテにこの次元での融和を提案していたのである。少年のマルテは恥じ入った。しかしその朗読を聞きながら、その提案の意味を漠然と感ずることは出来た。いつの日か両性の存在の秘密を知り、その高き次元における融和の可能性について十分に思考し理解できるようになることを前提に、アベローネは手を差し伸べてくれていると。マルテにとって、これは厳粛な約束のように思われ、それを果たすことがその後の仕事の一つになった。

約束はそれでも実現へと向かっている。いつしかその本は僕の離れられない数冊のうちの一冊になった。僕も今では開こうと思うページを一度で開けるようになったが、そのページを読むたびに、僕はベッティーネとアベローネのどちらを考えているのかが截然とは分けられなくなってしまった。いや、ベッティーネが僕の心の中ではより現実のものとなったのだ。僕が実際に知っていたアベローネは、まるでベッティーネを知るための準備のようだった。そしてアベローネは彼女そのものの本来の姿へ戻るように、ベッティーネへと吸収されてしまった。⁹⁾

アベローネとの約束を果たそうと考えれば考えるほど、アベローネの姿よりもベッティーネの姿の方が鮮明になってきて、ついにアベローネはベッティーネの姿に溶け込んでしまったと言われている。アベローネは架空の人物、ベッティーネは実在の人物であることを思えば、アベローネとの約束が小説内部に留まるものではなく、小説外の現実に接続する問題であることが暗示されていると言えるだろう。つまり「約束」は、マルテ固有の問題ではなく、小説外においてリルケ自身の果たすべき課題なのである。ここでようやくマルテとリルケは重なり合い、マルテによるゲーテ批判の文章を、他ならぬリルケ本人の意見の表出の一つと考えることができるように思われるのである。

そのことと関連してリルケは、現実世界において、妻クララにあてた書簡（1908年9月4日付）で次のように言っている。

僕は『ゲーテとある子供の文通』を読んでいる。ゲーテに対する強力できわめて切実な証言であるこの書は、あらゆる僕の疑念が正しかったことを証明している。君にはわかるだろうか。このことは、ゲーテの存在の普遍性とは別個にある、究極の尺度によって言っているのだよ。マルテ・ラウリッツはこう書き記している。「ゲーテとベッティーネ。2人に或る愛が育っていった。抑えようもなく、時機を逸することのない、まっとうな愛、まるで潮が満ちていくような、まるで高まりゆく年のような愛であった。ところが、彼は一つのことのできなかった。すなわち、彼女を、その志向性が指し示している方角へ向けて、自らを踏みこえて赴かせてあげるということである。（彼が最高の審級なのだから）。ゲーテはベッティーネを侍らせ、彼女に真剣に向き合うのではなく、好きにさせた。そして非難されて、当惑し、別の情事にうつつを抜かし…。

マルテ・ラウリッツの言うことは正しい。しかし、昨日から考えているのだが、ロダンもそのような場合には同じように失敗してしまっただろう。せめて同情のそぶりを見せるだけが彼には関の山だ。そのように男たちの能力が頓挫して、愛の慣習というものに触れただけでなすすべもなくまるでちっけな雲のように雲散霧消してしまい、憤怒も、嵐も呼び起こすことなく、この乾ききった大地に恵みの雨を降らさずにいるのを断罪しようとする、それはなんと大それたことであろうか。¹⁰⁾

段落の切れ目にある「マルテ・ラウリッツの言うことは正しい」という言葉はリルケ研究者の間では特に有名であるが、これによってマルテとリルケが無造作に重ねあわせられてしまう危険がある。ゲーテに疑念を懐きゲーテ嫌いを公言もしているリルケだから、そのゲーテから受けた影響は無であるか、あるいは無視できるほど些細なものに違いないという臆見すら、そこからは生じかねない。¹¹⁾ 小説世界によって現実世界のすべてが表象できないのと同じで、マルテの発言によってリルケとゲーテの関連のすべて説明できるわけではない。そもそも小説の中のマルテはリルケ本人のほんの一部分を分有しているに過ぎないのである。小説世界の主人公の考えと作者自身の考えの一致と齟齬については、きわめて慎重な分析がなされる必要があるだろう。

引用の後半部分を素直に読めば分かるように、リルケはゲーテ一人だけを批判の対象にしているわけではない。ロダンも連座させられている。ゲーテは、ここではその愛する能力を十全に発揮しようとせずに、「愛の慣習」の前になすすべもなく挫折を繰り返している男たちの一人に過ぎないのである。むしろリルケもそれを断罪できる特権的な位置にはない。だからこそ、断罪を「大それたこと」と語っている。リルケは、運命に翻弄される自分自身が、愛する女を愛しきれないという失敗の危険をはじめから免れているとは決して思っていない。すなわちゲーテとベッティーネの生きた時代からはるかに一世紀を隔したとしても、古来の愛のゼマンティックの効力はいぜん強力であり、振り切ろうにも容易には振り切れない長い影を揺曳するものであることを認めているのである。

ただし、『マルテの手記』を書き上げたリルケは、ゲーテと自らを差別化する手がかりを得て

いる。それは、アベローネ（＝ベッティーネ）からの約束を手にしてという一点においてである。もちろん自ら構築した小説空間において、自らのために作り上げた微かな手掛かりである。しかしそれはわざわざリルケが作り出した虚構であるがゆえに一層切実な手がかりであったと言わねばならないように思われる。いったい詩人リルケは、マルテのアベローネとの約束に何を託そうとしたのであろうか。そして、その約束をどのような形で果たしたのだろうか。その際にゲーテという参照枠を意識することはもはや無かったのだろうか。それとも、その参照枠を手放すことはできなかったのだろうか。

Ⅱ. ゲーテへの心的距離

リルケがゲーテの何を読んでいて、どの程度ゲーテに影響を受けていたのか。その詩的生涯において、ゲーテとの心的距離はどう変化したのだろうか。これは特に日本ではあまり問題にされない、リルケ研究における秘められたトポスの一つである。このトポス形成において先駆的かつ決定的な役割を果たしたのが、1958年に Köln および Graz で刊行された Eudo C. Mason の著作である。¹²⁾ その冒頭部分に次のようにある。

或る長い込み入った物語がその背後に隠されている。一つの物語、それはリルケの詩的世界の展開へと光を当てると同時に、ゲーテから精神世界へ流れ出る力能にも光を当てるものである。そしてそれは、この力能が、その都度想定される障碍に突き当たりながら、その精神世界に浸透していく様を明らかにするものである。¹³⁾

この言葉が Mason のプランの全容を端的に物語っている。つまり、リルケの詩的世界の展開が、世紀を超えて流れ込んでくるゲーテの詩的力能との、その都度の対決によって可能になっているという見取り図を描くものである。抽象的な言い方を改めれば、1875年生まれのリルケが属している時代、すなわち19世紀から20世紀にかけての幅広い時期の精神世界形成において、ゲーテの文学・思想が教養の基礎になっていたということ、そしてリルケはその精神世界の形成の在り方に、ある独特の反応を示しつつ独自の詩的世界を鍛え上げていったということが、ここでの基本的な理解となるであろう。

たとえばリルケは、親の意向で将来士官になるために受けていた教育から脱落した後、大学入学資格試験のために集中的な勉強を開始した。その際にゲーテの主要な著作を十分に勉強せずには試験を突破することができたとは、まず常識的には考えにくいであろう。もちろん試験準備のためだけにゲーテを手にとったわけではない。¹⁴⁾ リルケが早くから自発的にゲーテの作品を読んでいた痕跡は、日記や書簡や作品の中に複数見て取ることができる。¹⁵⁾ おそらく少年リルケは、同時代の精神形成のカノンへと、自ら積極的に、というよりはむしろ心の赴くままに吸い寄せられていたと考えるのが自然なのである。そしてゲーテの言葉を手元において、自らの着想に援用していた。そのような少年リルケの手法を端的に表すゲーテ・オマージュが、母に宛てた書簡の一節に見出される。

すべての被造物をとくにご覧ください。たとえば木の葉を。それは様々なアミノ酸で構成されています。人間は、最も小さいものに至るまで、その構成要素をすべて特定しました。そこであの有名な1806年（原文ママ）生まれの物理学者エヴァンゲリスタ・トリチェリを一人の男が訪ねてきて、次のように言いました。「ここに一枚の葉を構成するすべての要素があります。これで私のために葉を一枚作ってください」。この物理学者は微笑んで断りました。『ファウスト』中の崇高なゲーテの言葉を援用して次のように言えるでしょう。「私はもろもろの部分を手にはしています。残念なことにそれらを結びつける精氣的な靱帯が欠けているのです」。¹⁶⁾

これは1889年10月27日に母に宛てたとされる手紙の言葉である。リルケ弱冠13歳。もちろん「1806年」は明らかに「1608年」の間違いである。ただこれが誤植かリルケ自身の書き間違いかは定かではない。斜体にしてある部分は、リルケ自身が言っているように『ファウスト』第一部「書斎の場」のメフィストフェレスの次の台詞が元となっている。

何か生きたものを認識し記述しようと思いながら、
まず精気を追出だしにかかろうとしやがる。
それで手元に残るのは部分ばかりだ。
あわれ、精氣的な靱帯が欠けておるのだ。¹⁷⁾

「精氣的な靱帯」（das geistige Band）という言葉は、リルケのお気に入りの言葉であつたらしく、これを後にも使用している。¹⁸⁾ このようないわゆる間テクスト性は、その後のリルケの詩作および書簡にしばしば見受けられる特徴である。ここでは、13歳のリルケらしく、出典を明記した引用という最もおとなしい原初的形態に留まっているのだが、しだいに¹⁹⁾ 出典を明記しない、より高度で決定的な引用を自分のテキストに忍び込ませるようになってゆく。¹⁹⁾ ともあれ、初期のリルケのゲーテ「引用」はかなり素朴なものであって、芸術的価値どころか詩人としての創意工夫もない。それは、少年リルケを取り巻く時代の「教養」の自明性を髣髴とさせているという点でのみ重要である。

この引用で話題となっている生命体の本質は、いわゆる創発としての自己組織化にある。たとえば部分、構成要素を手元にすべて揃えたところで、生命体の自己組織化は起こらない。生き物には機械論的には決して理解できない部分が残されている。この生命の神秘性については、リルケの時代に急速に注目され、頻繁に哲学的問題として取り上げられるようになっていった。たとえば「エラン・ヴィタール（生命の飛躍）」の概念で知られるベルクソンの『創造的進化』は、1907年の出版である。リルケは後にルー・アンドレアス・サロメによってベルクソンに導かれ、その内容に理解を示してもいる。²⁰⁾

そのような哲学の問題設定を、少年のリルケは漠然とではあるが感じとり、先に挙げた母への書簡でゲーテの『ファウスト』の一場面と結び付けたのである。もちろんそのようなことができるのは、1832年の死以降一旦その光輝を失ったゲーテ像が、19世紀も終盤に差し掛かって、教養の基礎としてその輝きを取り戻しつつあったからである。Mason の言葉を借りれば、まさに

「ゲーテから精神世界へ流れ出る力能」を感じたリルケは、その後のある時期まで、ゲーテという「教養」、あるいはその「言葉」と様々に戯れているのである。例えば、次にあげる詩は、1896年7月20日に、ラスカ・フォン・エステレン（Laska von Oesteren）宛て書簡中に挿入されたいわゆる献呈詩の一部である。

Und wie ein Tasso geh ich dort und träume,
Was in Veleslavin mir doppelt frommt,
Weil, mich zu tadeln, kein Antonio kommt,
Wenn ich von lauter Jubel überschäume.

そして僕はまるでタッソーのごとく歩み、夢心地だ、
ヴェレスラビーンで僕は二重の意味で恵まれている、
なぜって、僕を叱りにアントーニオはやって来ないから、
もし僕が喜びのあまり感情を爆発させても。²¹⁾

ヴェレスラビーンはプラハ城の西にある地区の名称で、エステレン男爵家の夏の邸宅があったところである。そこにリルケはたびたび逗留させてもらい、献呈詩の中で自分のことを「宮殿詩人」²²⁾とさへ呼んでいる。恵まれているという「二重の意味」の一つは、したがって男爵家の邸宅に招かれているということ、もう一つがここで言われているように、「アントーニオのいないこと」である。リルケはもちろんゲーテの戯曲『トルヴァート・タッソー』から着想を得て、自分を情熱の詩人タッソーに見立てている。そして、感興の赴くままに詩作が許されている境遇を、タッソーの有頂天をいつも邪魔しにやってくるアントーニオの不在として表現したのである。これはとるに足らない無邪気な言葉遊びに過ぎないかもしれない。しかしこのような無邪気によって、真実は露わにされるものである。つまりこの時期までのリルケは、ゲーテという時代の「教養」をまったく無警戒に摂取しては無批判に用いていたのである。しかし、徐々に転機は近づいてくることになる。

1897年3月25日付ノラ・グートスティッカー宛て書簡には次のようにある。これはリルケが初めて敢行したヴェネチア旅行の前日に書かれたものである。

僕はゲーテがイタリア紀行でヴェネチアについて語っているところを読んでいる。ほとんどが素っ気ないもので劇場や民の生活のことばかりだ。当時のゲーテはまだ相当に非近代的だった。というのも、後になってゲーテは「気分それ自体」に対する感覚をはるかにたくさん身につけたように僕には感じられるからだ。²³⁾

ここには「気分それ自体」(Stimmung an sich)と「非近代的」(unmodern)という2つの鍵となる言葉が見出される。前者についてリルケは、例えば、ラスカ・フォン・エステレン宛ての別の手紙(1896年3月23日付)で「すべてが気分なのです。僕は気分という枷に、すっかり身を任せきっているのです」²⁴⁾と書き送っていた。さらに1896年11月29日には、詩人リヒャルト・

デーメルに、「純粹なる気分詩」(reine Stimmungsliryk)²⁵⁾の投稿を呼びかける書簡を送ったりもしている。このように「気分」はこの時期のリルケにとって一番の関心事であったが、これは、特定の対象に向けられる「感情」とは全く異なるものである。それは、すでに何かに関連付けられた「感情」とは違って、情動の深い部分に、未分化、無規定のままに巢食っているものともいえるだろう。「気分」はそのような根源性ゆえに、現存在の在り方を開示するものとして、ハイデガーなどによっていずれ哲学の明確な思惟の対象に昇格させられるが、リルケの「気分」はこれ为先取りしている。少年リルケの生きた19世紀末ヨーロッパには、存在の根拠が地滑り的に変化していく漠然とした感覚のようなものがあつたが、その名状しがたい無規定な感覚に、特に抒情詩人たちがそれにいち早く注目していたのである。これはニーチェが「折衝主義」として批判した時代の宿痼とも関連しているように思われる。すなわち時代固有の形式の欠如ゆえ、さまざまな時代の様式を借用し継ぎ接ぎして表面を取り繕うが、その隙間から無定形の何ものかが漏れ出し、充満している状態とも言えるだろうか。ともかく、若きリルケは、それも一つの時代の姿であるとして認め、それに身を任せてみるのが「近代」(modern)だと言いたいようである。

それに比べて一世紀ほど前の『イタリア紀行』のゲーテは、劇場や民の生活などヴェネチアの具体的な物事を語っている。そこでは素朴な事物が記述の対象になっていて、「気分」どころか「感情」さえも問題になっていないかのようなのである。一方リルケは、これからヴェネチアに向かう自分の「気分」をこそ問題にしたいと考えている。つまりリルケにとっては、ヴェネチアという対象以上に自分自身が重要であつて、旅において専ら自らの現存在が問い直されることを望んでいるのである。ところが参考にしようと思った『イタリア紀行』当時のゲーテには、自らの現存在への問いが希薄のように思われた。ゲーテにとってそれは、まるで自明で安定した地盤に安置されているかのようなのである。その意味において、リルケは、ゲーテを現存在の根底に地滑り的な変化を内包している「近代」(modern)という地盤にいる自分と対照させ、「非近代」(unmodern)と述べたのであつた。

ここでは、ゲーテがそれまでのように単なる言葉遊びの相手ではなく、一種の「参照枠」としての役割を獲得しつつあることが見て取れるだろう。つまりゲーテは、リルケにとって自らの歴史的位罫、自らの存在様態を明確に意識に上せるための手掛かりとなる存在として姿を現してきたのである。しかしこのことは、当然ながら反作用として、「異物」としてのゲーテへの批判を惹起することにならざるを得ないであろう。

Ⅲ. エディプスコンプレックス

Eudo C. Mason はその先駆的な論文で、次のように看破していた。すなわち、リルケは21歳(1896年)まではゲーテを念入りに読んでいたが、それ以降は無視を決め込むか、読んでも批判的に読んだと。²⁶⁾大枠はそれで正しいだろう。しかし不十分な表現であることも否めない。これまでの議論を踏まえてより正確に言えば、リルケは21歳(1896年)までは、時代の教養の基礎としてゲーテを受容するのに精いっぱいであり、批判的に読みこなすところまでは達していなかったが、それ以降は、自らを省察するための批判的参照枠としてゲーテを用いることが可能になりつつあつたということになるだろう。

ただしその後の歩みも決して単純なものではなかった。それが後世の我々の目を幻惑させることに繋がるのである。リルケは、自らの著作の出版者であるインゼル書店のキッペンベルク夫妻の影響でゲーテを再発見する1912年までの間、どういうわけか激烈にゲーテを批判し、周囲を困惑させることがあった。しかもその際、リルケ本人が、自分の中で何が起きているのかがまったく理解できていないかのようなのである。

例えば1904年の夏、スウェーデンにしばらく逗留した時のこと、早々にリルケは女流画家のトーラ・ホルストレームとゲーテ評価を巡って衝突しているが、こともあろうにその時リルケは、画家のゲーテ礼賛の言葉に対して我を忘れ激昂するという醜態を演じてしまった。その後始末がゲーテとリルケの厄介な関係を暗示している。次は、リルケが女流画家に送った言い訳がましい曖昧な詫び状の一部である。(1904年8月2日)

あの晩の会話の記憶はあなたにはきっと不快でありましょう。私はその記憶を破り捨ててしまいたい。もはや価値のなくなった手紙の様に。(中略) 私にはゲーテを受容するための器官が欠けているのです。それ以上のことは私には本当に分かりません。²⁷⁾

このリルケ自身の「証言」には、明らかな嘘が含まれている。すなわち「ゲーテを受容するための器官が欠けている」という部分である。これは、その後のリルケの詩人としての成熟の過程をつぶさに見れば、決して首肯できない発言である。もしそれを解釈するなら、感情を制御できなかった失態を、ゲーテを理解すること自体の不能の問題、すなわち詩的趣味判断の不能の問題にすり替えているだけだという主張が成り立つかもしれない。しかし、そう簡単ではないとも思われる。リルケは苦しい紛れの言い訳を述べているのではなく、本当にそう感じているという解釈も同程度に成り立つのではないだろうか。なぜなら、リルケはゲーテが話題になった時にどうしてあんなにも激昂してしまったのか、自分でも全く理解できていないからである。

少年期からまるで習慣のように読み、その言葉を自分の語彙に取り込んで折に触れて使用してきたゲーテであるのに、それに対する自分の感覚に自信が全く持つことが出来ない。ゲーテは自分の心の中のどこに仕舞い込まれてしまったのか、いやどこに消えてしまったのか、全く分からない。果たして消えたのはゲーテ自体なのか、いやそれとも自分の中にあっただけの受容器官であるのか。もちろん真相はどちらでもない。「ゲーテ」も「器官」もどちらも消えてはいない。ただそれらは諸共にリルケの意識の底を突き破って情動の奥深くに沈んでいって、理性的自我によっては手が届かなくなってしまったか、あるいは何らかの理由で意識化に強く抑圧されてしまっているのである。これが無意識的な何らかの機構によってなされているがゆえに、リルケはうろたえているのである。この時期のリルケにとってゲーテは、以前のように明確に意識できる対象ではなく、むしろ「気分」を構成するようなより深く見えにくい存在になったと言える。

これに関して Mason は、1901年から1910年にリルケの示したゲーテ嫌いは、学校教育におけるゲーテ礼賛に素直に同調していた過去の未熟な自分へのルサンチマンであったと述べている。²⁸⁾ これも一理あるように見えるが、厳密に言えばそうではないだろう。なぜなら、ルサンチマンとは対象を強く意識する「感情」であって、「気分」のようなより深い無意識的な心的状態そのものではないからである。ルサンチマンとして片づけられない何らかの別の心的機構が、リルケの

この時期のゲーテ嫌いの内部に読まれねばならない。そもそもルサンチマンからは憎しみや卑屈以外の何物も生まれない。しかし「気分」からはそれ以外のものが生まれ得ることに注意が必要であろう。

ただMasonの言う「1901年から1910年」という数字には特別の意味を認めねばならないだろう。すなわち、この時期は、リルケがロダンやセザンヌやゴッホを中心とする造形芸術から学びつつ、過去の自分の詩作から意識的に距離を取ろうとしていた時期である。過去の詩作とは「気分詩」(Stimmungslyrik)のことに他ならない。そのことについて、1902年9月5日の妻クララ宛の手紙には以下のように語られている。

ロダンはその作品の内部にないものは何も経験したことはなかった。(中略) 大事なことは、夢見ることや、計画の段階に留まったり、気分のなかにいること(In-Stimmung-Sein)に満足してしまうのではなく、常に渾身の力ですべてを物の中に移し入れることだ。²⁹⁾

以前「すべては気分」と言っていたころのリルケにとっての詩作とは、「気分」をそのまま言葉に写し取ろうということであった。しかしそれはきわめて困難な試みである。「気分」は情動の深い部分に未分化のままに巣食っているものであり、本来言語化しえないものだからである。したがって、「気分詩」のほとんどが、「気分」にどっぷりと浸って、曖昧な「感情」を語っている散漫なものでしかなかったと、リルケには思われた。そこでリルケは、ロダンの秘書として働きながらその仕事ぶりと作品をつぶさに観察することで、堅実な創作の秘密を究明しようとした。その秘密とは、リルケによれば、芸術活動は決して「感情」を語るのではなく、あらゆる経験を作品(リルケは「芸術事物」(Kunstding)とこれを呼ぶ)の中へ移し入れるということだったのである。そしてこの芸術事物の制作の極意に関して、詩だけが例外であるはずはないと強く確信したリルケは、1903年8月10日、ルー・サロメ宛てに次のように書いている。

何とかして僕も物を作れるようにならなければいけない。彫塑的な物ではなく、書かれた物(geschriebene Dinge)、つまり手仕事から生まれてくる現実を。³⁰⁾

すなわち「書かれた物」の制作という、詩作よりもむしろ職人の仕事と呼ぶのが相応しい活動にリルケが従事していた時期が、Masonも注目する1901年から1910年なのである。そしてこの時期にちょうどゲーテへの反感の情動が強まったということは、やはり注目すべき不可解な事実である。すでに指摘したように、リルケはそれ以前、ゲーテに関して「気分それ自体」に対する感覚が乏しいことを理由に、「非近代的」という、自分との懸隔を匂わせる評価を下していた。しかし今度はリルケ自身が「気分それ自体」を重要ではないと考えるようになった。ところが、ゲーテへの距離は縮まらず、逆に一層、絶望的に開いてしまったかと思わせるような言動が目立つようになる。

確かにリヒャルト・デーメルのような「気分詩」は、リルケのパリでの造形芸術体験とともに雲散霧消してしまったと断言できよう。しかし、ゲーテはどうなのか。むしろ、それまで「気分」のベールに阻まれて完全に捕捉できていなかったゲーテは、本当は逆にその存在感を増してきた

のではないか。そもそも幼少のころから語彙形成や文彩の選択に重大な影響を及ぼしてきたゲーテを、パリに出たリルケがすべて振り払うことなど可能であっただろうか。しかもドイツを中心にではあるが、ゲーテ・ルネサンスともいえる受容の機運はますます高まっていたのである。確かにボードレール、ロダン、ゴッホ、セザンヌの芸術は、リルケの成長のきっかけ、手掛かりを与えたかもしれない。しかし自らのうちにある語彙、文彩という詩作の素材の大部分は、ゲーテを中心とするドイツ文学を読むことによって摂取してきた。その意味で、ゲーテは自分の血肉となっていた。しかしこの時期のリルケは、どうしてもこのことを容認できなかったのである。それはなぜなのか。

リルケがドイツ語圏辺境の地プラハでボヘミア人に囲まれて育ったことは、無視できない事実である。その地のドイツ語は、生きた現実というよりどこか人工的な培養物、あるいは温室の植物のような儚い存在であった。ドイツ語としてそれ自体の持つべき共時的な活力はかなり限定されたもので、むしろ過去のドイツ文学にその養分を寄生しているという風でもあった。ゲーテはその養分を中心であった。しかもリルケはユダヤ人ではない。ユダヤ人たちは戦略的にドイツ語やドイツ的教養を身につける自由があったが、リルケにはそれすらなかった。「ゲーテ」は選択の余地のない義務だったのである。その意味でゲーテはリルケにとって絶対的に強力な父親的存在であり、内面化された権力あるいは規律にまでなっていたと考えられる。これは、1896年までのリルケのあまりに無邪気で無防備なゲーテ引用法からも推測できることである。つまり1896年までのリルケのゲーテ引用は、内面化された権力としてのゲーテ自体によって自動的に行われていたのである。

ところがある時期（1897年ごろ）、リルケはこの状態が、自らを詩人として鍛え上げる足枷となっていることに突如気付き始めた。これがその後のゲーテをめぐるリルケのあらゆる不可解で混乱した言動の原因である。強力な詩人、いやドイツ語圏で最も強力な詩人ゲーテに対する自身の矮小さに気付いたと言っても構わない。例えば、ハロルド・ブルームは、「強い詩人」誕生の要件として、先行の詩人の影響に対する防御や創造的な誤読に注目しているが³¹⁾、プラハ生まれのリルケは、先行する強力な詩人ゲーテに対する防御を行うこともなく、その意図的な誤読を試みることもなく素直にそれを認めてきたために、「強い詩人」になる機会をほとんど逸しそうになっている。呪縛を脱し「強い詩人」へと再生するためにはどうすべきか。リルケはもがく。パリに逃れ、もっぱらフランスの詩人を読み、さらには詩人ならぬ造形芸術家までを師と仰いでみたりする。冷静に観察すればリルケの行為は荒唐無稽なのであるが、それがゲーテという「権力」から逃れようという一心から来ているとすれば、納得のいくことかもしれない。しかし、自らの言語と教養の核心部へとすでに内面化されたものからは、何をしようが、どこに行こうが、決して逃れようはない。

この時期のリルケは、詩神ムーサをめぐる、ゲーテとの間できわめて厄介な心理関係、あるいは権力関係に陥っていたと考えざるを得ない。その関係は、まさに詩神ムーサを母親、ゲーテを父親とする、一種のエディプスコンプレックスである。そしてリルケは、母親ムーサの愛情を一身に受けがために父親ゲーテを排除しようという無意識的願望の中で、オイディプスのごとく彷徨するのである。このときリルケは詩人として二重の去勢不安を感じていたはずである。すなわち母（ムーサ）をめぐる対立した挙句、強大な父（ゲーテ）によって去勢されるか、ある

いは父の支配下に甘んじていつまでも去勢されていると感じるか、という二者択一である。

普通の親子関係であれば、母親をあきらめ両親に背を向けて社会へと旅立つだろう。しかし、詩人であり続け、そうありたいと意欲するリルケに、そのような「正常な道」の選択はあり得ない。リルケに残されているのは、母親ムーサとの近親相姦を貫徹するために、父親ゲーテを排除することである。それはしかし簡単にできることではない。ゲーテは自分を形成する血肉となつていのであるから、ゲーテを単に排除すること（もちろん心理的に）は、自分自身を殺すことにならざるを得ない。リルケに残された可能性は、ゲーテそのものの消去ではなく、エディプスコンプレックスの成立要件である絶対的な父親存在という位置からずらすことである。そのためには、ゲーテより自らが抜きこんでいる部分を何としてでも発見するより他にはなかった。

IV. 放蕩息子の帰還

リルケを「弱い詩人」から「強い詩人」へ変貌させた1901年から1910年の間の主たる要因は、通常そう信じられているようにパリ、ロダン、セザンヌ経験なのではなく（それらは手段・仮託に過ぎない）、密かなゲーテとの対決であったという仮説が、にわかに説得力を持つように思われる。リルケはこの秘められたゲーテとの対決を、「愛」の一点に絞り、遂行しようとしていると思われる。そう信じる根拠は、以下に述べるように反ゲーテの狼煙を上げ続けた時期に書かれた『マルテの手記』の中心テーマがまさにそれだからである。

ゲーテについて『マルテの手記』で次のように言われていた。すなわち、「この愛する女は詩人に負わせられた義務であったが、彼はそれを果たすことができなかった」。これは Mason も言っているように、それ自体では、どうしてリルケがこの点にこだわっているのか理解に苦しむところである。しかしこれまでの議論から、詩神ムーサをめぐるエディプスコンプレックスから抜け出すために、リルケがゲーテの強大な存在を切り崩しにかかっていることと、何らかの関係があるという推測が成り立つように思われる。この推測を支持し補強するような言葉をリルケは妻クララ宛て書簡に残している。

いかにベッティーネ・アルニムが素晴らしい存在であるか。かつて僕はベッティーネよりもさらに先に行く女性に出会ったことがある。そのとき僕は言葉にできないほどの讃嘆の念に駆られ、「魂の官能性」という言葉を書き記したものだ。それはサッポー以来偉大なる変容を続けてきたものの一つだ。世界はそれらの変容を通じて徐々により現実化してきたのだが、僕はベッティーネの中にそれがすでに完全な形で存在していたことを理解している。（一方、ゲーテはそれに驚嘆して、信じられず、怖気づいてしまったのだ）。彼女は何たる世界のエレメントなのか。何たる変化なのか。彼女の生きた時代の大気中において何たる疾風だったか。人はいかにして真正面から愛することができただろうか。僕だったら彼女の手紙に答えられたのではないかと思う…³²⁾

ゲーテができなかったことを、自分はできるのではないかとリルケは言っている。ただしそれは単に「愛する女」に愛を返答するということではない。その「愛する女」が、まさにサッポー

のエLEMENTの変容した存在であるということに意味があるのだ。サッポー、それは第十番目のムーサと呼ばれたレスボス島の女流詩人。その「魂の官能性」をほぼ完全な姿で体现すると思われるベッティーネという女の愛に応えることこそが重要なのである。ゲーテにはそれができなかった。つまりゲーテは、実は詩神ムーサとの愛情関係に失敗しているのではないか。ゲーテはムーサに愛されるばかりで自ら愛そうとしていない。大詩人ゲーテとムーサの関係は決してリルケの付け入る隙のない完全無欠なものではないようだ。リルケはこのように暗に主張することで、自らの嵌まり込んでいる苦境、ゲーテとムーサをめぐるエディプスコンプレックスが、そもそも成立していないことを証明したかったのではないだろうか。鍵となる記述が『マルテの手記』の中にある。

彼女は、結合するということは、孤独の増大に他ならないことを知っていた。彼女は性の有限の目的を、その無限の意図で打ち破ったのであった。真つ暗闇の抱擁のなかで心の安らぎを求めて夢中に掘り進めるのではなく、憧憬を目指したのである。彼女は2人のうちの1人が愛する者で、1人が愛される者であることを軽蔑し、愛される弱い者を彼女の寝所へ誘い、自らの存在によって灼熱させ、愛する者に変えて去らしめた。このような高き別離により、彼女の心は自然になったのである。³³⁾

ここで「彼女」とはサッポーのことである。「性の有限の目的」とは、生物的な結合という表面的な意味に加えて、「愛する者」としての女と「愛される者」としての男のつながりという、旧来の愛のゼマンティックをも含意していると思われる。リルケはゲーテが相変わらずこの中にとどまっていると見ている。ここにとどまる限り、男も女も運命に翻弄され、愛情関係の不幸から決して逃れられない。逆にサッポーの「無限の意図」とは、この旧来のゼマンティックにとって破壊的に働く、全く別の愛のかたちである。レスボス島のムーサたるサッポーにとってそれは女性同士の愛のことであったが、リルケは単なる同性愛の問題とは考えなかった。リルケは、サッポーの愛の秘蹟を、「愛される者」がその安逸にとどまらず自ら「愛する者」になることのできるような一つのイニシエーションと理解したのである。イニシエーションに別離はつきものである。サッポーの愛の秘蹟は、すなわち別れの秘蹟でもあると考えたところが、リルケの最大の発明である。リルケはこれを、「対象を超えた愛」と定式化し、その後の『ドゥイノの悲歌』を中心に詩作の課題に据えるが、この一点において、自分とゲーテの間に、截然とした境界画定を行えると考えた。

ここまで思考してきたリルケにとって、ゲーテのベッティーネ（＝詩神ムーサ）との関係は二重に破綻したものだと確信されたはずである。まず、「愛される者」から「愛する者」へのイニシエーションへの道を自ら絶ってしまっていること。そして「対象を超えた愛」と「別離」という詩神ムーサの愛の秘蹟に目をつぶっていること。この二点においてリルケにはゲーテという絶対的な権力が廃位されるように思われた。その廃位によって自ずと、父（ゲーテ）、母（詩神ムーサ）、息子（リルケ）のエディプスコンプレックスは解消する。自らが「強い詩人」になることを阻害していた根本的原因が取り除かれ、今度は一転、ゲーテを肯定的に評価し、みずからの豊穡なる教養、語彙の基盤として創造的に用いる可能性が、眼前に開かれる。このようにして、困

難な心理的牢獄からの出口を見出したリルケは、必ず故郷に帰ってくるはずである。もちろんこれは比喩である。つまりプラハというドイツ語圏の果てにある故郷ではなく、ゲーテを中心とするドイツ語、ドイツの教養という故郷への帰還のことである。

これに関して、『マルテの手記』の終結部に「放蕩息子のたとえ」の翻案が使われていることが象徴的であると思われる。なぜここで「放蕩息子のたとえ」なのか。『マルテの手記』は数々の断片、挿話のモザイク状の集成であって、一貫した筋のない実験的な小説の先駆であると誤解して、終結部も独立した挿話の一つだと安易に結論付けてはならないだろう。リルケは、無闇に継ぎ接ぎの実験モザイク小説を書いたのではない。それは本論で主張するように、ゲーテとの対決という中心から湧き出る、「強い詩人」への再生の希求の記録と読まれるべきなのである。「放蕩息子のたとえ」が巻末を飾ることの意味は、リルケ自身を放蕩息子に重ねあわせることでようやく解明できるだろう。

「放蕩息子のたとえ」、つまり『ルカによる福音書』15章11-32節の記述は次のようである。ある人に二人の息子がいた。あるときその次男坊が父親に財産分与を願い出て許され、すぐにそれをもって旅に出たのであった。ところがその次男坊はひどく身を持ち崩して全財産を使い果たしてしまった。何もかも失ったときその地方にひどい飢饉が起こった。食べるものに困り、その地方の人のところに身を寄せ、不浄な動物である豚の世話を引き受ける。せめてその豚の食糧のイナゴマメでいいから食べたいと思うほどの困窮ぶりであった。息子は故郷を思い、罪と汚辱にまみれた自分はもはや息子ではなく、使用人の身分としてでもいいから父親のもとに住まわせてもらおうと考え、故郷へと帰ってくる。そんな放蕩息子を、父親は無条件の愛で抱擁し接吻する。そこでは、父親＝神の絶対的な愛が主題となっていると考えられる。しかしリルケはそれを大胆にも、広大で強力なあらゆる愛を拒絶しようという息子中心の話へと作り変えてしまったのである。

翻案の理由はもはや明白であろう。すなわち、「愛される者」へ転落の恐怖である。サッポーあるいはベッティーネの愛の秘蹟を知ることによって、新しい愛のゼマンティックの地平に生まれ変わり、ゲーテを超越できると確信したリルケにとって、「愛される者」へ転落は最大の恐怖であっただろう。したがってわが身を愛で抱擁してくれるものが、たとえ神そのものであっても、現時点では拒絶しなければならない。だからこそ、リルケの放蕩息子の帰郷の理由は、福音書の放蕩息子とは全く違ったものなのである。福音書の放蕩息子は手持ちがなくなって、藁をもすがりもちで父のもとに帰ってくるのであるが、リルケの放蕩息子は、絶対的な愛にも決して屈しない人間であることを証明するべく故郷に帰ってくるのである。それは、詩人リルケ自身の姿でもある。詩人として再生するために、自らの本来あるべき場所へリルケも必ず帰郷を試みるだろう。このように、『マルテの手記』の「放蕩息子の帰郷」は、リルケが真に強力な詩人となるための最大の試練の寓意として読まれなければならないのである。

リルケが故郷を離れ、パリという別の土地を中心に活動していたのは、父（ゲーテ）から分与された財産（ドイツ語の教養と語彙）を詩的放蕩息子として蕩尽してしまいたいという衝動に突き動かされたためであったとすら言えるかもしれない。リルケはこの期間、ゲーテを無視し、ゲーテ礼賛の言葉を聞けば激昂し、ゲーテ嫌いを公言し、ゲーテ理解の不能を嘆いていた。リルケはどうしてもゲーテを忘却の淵へと追い込みたかった。『マルテの手記』の冒頭付近において、

マルテがわざわざ次のように自分に言い聞かせなければならなかったのは、この観点からも解釈できるのである。

記憶を持っているからといっても、それではまだ十分じゃない。記憶がいっぱい溜まったら、それを忘れることが出来なければならない。再び記憶がよみがえるまで待つ辛抱がなければならない。記憶自体は、まだ存在しているとは言えないものだからだ。それが僕たちのなかで血となり、眼差しとなり、身のこなしとなり、名もないものとなり、自分と区別できなくなったときに、きわめて稀な瞬間に、一行の詩の最初の言葉が、記憶の真ただ中に、その内部から立ち上がってくるのである。³⁴⁾

放蕩息子たるリルケは、自分の中にゲーテから与えてもらった財産（＝記憶）の痕跡すらすっかり消えたように忘却されて、すべてが新しく開始されるという予感を感じたときに、ようやくパリを離れられると思ったはずである。

そう、心に平静さを取り戻した彼は、かつて成し遂げられないままに置かれ、ただ待つだけに終始してしまっているものの中で、最も大切なものを、今から挽回しようと決心した。彼はとりわけ幼年時代のことを考えた。静かに沈思するにつけ、幼年時代はそのままになっていると感じた。幼年時代の記憶はどれも、それ自体予感のような漠然とした姿をしている。それらが完全に過去であるために、ほとんど未来のようになってしまっていた。それらすべてをもう一度、そして、今度は現実に関心へ引きつけること、それが、本来の場所を離れていた者が帰ってきた理由であった。³⁵⁾

ここで「本来の場所を離れていた者」の原語は der Entfremdete である。「彼」や「放蕩息子」ではなくわざわざこのように言っていることにはもちろん意味がある。entfremdet は「疎外された」という形容詞であるが、その「疎外」はヘーゲルの意味において理解されるべきである。すなわち、自己が自らに含まれる自己否定的契機を外化したとき、外化された自己が本来の自己に対して立つが、この関係のことを、ヘーゲルの用語で「自己疎外」Entfremdung という。まさにその意味である。つまり、自己は、本来の場所にとどまり、自己に充足しているだけでは本来の自己を知ることはできない。自らの否定的契機を外化する活動を為すべく、本来の場所から別の場所に離れてみることによって、自己は初めて、本来の自己の何たるかを知るのである。『ルカによる福音書』15章11－32節の記述においても確かにそうだった。故郷に残っていた兄は、父の愛の意味を全く理解できなかった。自己の否定的契機を外化するという経験を全くしていないからである。

リルケの翻案した「放蕩息子の帰郷」をこの「自己疎外」の観点から読むこともできるだろう。『マルテの手記』の舞台が最初パリであり、それが最後には、「故郷」への帰郷で終わることが象徴的である。パリは、リルケにとって自己の否定的契機を外化するための非本来的な場所であった。故郷に帰りゆく放蕩息子は、「かつて成し遂げられないままに置かれ、ただ待つだけに終始してしまっているものの中で、最も大切なものを、今から挽回しようと決心した。彼はとりわけ

幼年時代のことを考えた」。この「幼年時代」は文字通りの幼年時代に限定して考えられるべきものではない。「幼年時代」とは、「自己疎外」が問題となるような一つの時間構造の比喩なのである。すなわち「完全に過去であるために、ほとんど未来のようになってしまった」という時間構造を内包するあらゆる記憶、それがリルケの「幼年時代」である。「ゲーテ」はその中でも、この時期のリルケにとって最も困難な課題であった。何としてでもその特別な時間構造（＝「自己疎外」）の中において昇華しなければならなかった桎梏であった。したがってついに『マルテの手記』を書き上げ、パリという非本来的な場所を離れることができるようになったリルケが、「ゲーテ」と和解し、その経験をやり直すのは、文字通り時間の問題ということになるだろう。

結語

実際にリルケは、彷徨の十年余りを乗り越えて、再びゲーテに帰還する。それは必ずしも『マルテの手記』の放蕩息子のように確信に満ちてではなく、恐る恐るではあったのだが、とにかくリルケは帰還したのである。出版者キッペンベルク夫妻やパトロンのマリー・タクシスの導きが功を奏したという側面もあるが、実際にリルケ自身がそれを希求していなければ当然叶わなかった。またそのためにリルケは準備を進めていた。その後のリルケとゲーテの詩的連関の展開については、稿を改めて論じることしたい。

注

- 1) Rilke, Rainer Maria: Sämtliche Werke. Hrsg. von Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zinn. Bd.VI. Frankfurt a. M. (Insel) 1966, S.898.
- 2) ベッティーネとゲーテの出会いについて次のように言われている。「それは4月23日の午後、おそらく4時ぐらいだった。ベッティーネはヴィーラントの推薦状を召使に手渡すと、2階にある面会室にて胸を高鳴らせて待っていた。しばらくたつと両開きの扉が開いて、詩人が入ってきた。それはベッティーネの脳裏に浮かんでいた若き理想像ではないものの、美麗なる壮年の堂々とした姿であった。詩人は大きな畏敬の念を起させる眼でじっと彼女を見つめた。この最初の印象がベッティーネにはあまりに強烈過ぎて、彼女はパニックになって一言も発せられなかった」。Vgl. Bettinas Leben und Briefwechsel mit Goethe. Auf Grund des von Reinhold Steig bearbeiteten handschriftlichen Nachlasses neu herausgegeben von Fritz Bergemann. Leipzig (Insel) 1927, S.28.
- 3) 1812年刊のグリム童話初版第一巻（Kinder und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Berlin, in der Realschulbuchhandlung 1812）の巻頭に、献辞「エリーザベト・フォン・アルニムに」（An die Frau Elisabeth von Arnim）と掲げられてある。
- 4) Arnim, Bettina von: Goethe's Briefwechsel mit einem Kinde. Seinem Denkmal. Berlin (Dümmler) 1835.
- 5) Eudo C. Mason は1908年の晩夏にリルケが同書と巡り合ったのではないかと述べている。Vgl. Mason, Eudo C.: Rilke und Goethe. Köln und Graz (Böhlau) 1958, S.23.
- 6) Rilke, Rainer Maria: Sämtliche Werke. Hrsg. von Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zinn. Bd.VI. Frankfurt a. M. (Insel) 1966, S.896.
- 7) Ebenda.
- 8) Ibidem S.898f.
- 9) Ibidem S.897.

- 10) Rilke, Rainer Maria: Briefe in zwei Bänden. Erster Band 1896 bis 1919. Herausgegeben von Horst Nalewski, Frankfurt a. M. (Insel) 1991, S.311.
- 11) 我が国においてもドイツにおいても、この臆見が幅を利かせている。その歴史的経緯については、拙論「リルケとゲーテという主題について：リルケ受容史に関する批判的考察」『史艸』54巻、日本女子大学史学研究会、27-45頁を参照。
- 12) Mason, Eudo C.: Rilke und Goethe. Köln und Graz (Böhlau) 1958.
- 13) Ibidem, S.7.
- 14) インゲボルク・シュナックによれば、1892年5月、リルケはかねてから恋仲にあったオルガ・ブルマウアーという女性と、リンツからウイーン駆け落ちしたが、ただちにとらえられプラハへ送られた。リルケはリンツの実業学校を退学処分、オルガはリンツに帰った。失意のリルケは、プラハでゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』『親和力』『詩と真実』を読みふけた。さらに『若きヴェルターの悩み』についてリルケは精通していたという。Vgl. Schnack, Ingeborg: Rainer Maria Rilke. Chronik seines Lebens und seines Werkes 1875-1926 Eweiterte Neuausgabe herausgegeben von Renate Scharffenberg. Frankfurt am Main und Leipzig (Insel) 2009, S.30f.
- 15) Vgl. Mason, Eudo C.: ibidem, S.17f. und S.100f.
- 16) Sieber, Carl: René Rilke, Jugend Rainer Maria Rilkes. Leipzig (Insel) 1932, S.99.
- 17) Goethe, Johann Wolfgang von: Faust. In: Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Herausgegeben von Erich Trunz. Band III. Dramatische Dichtungen I. Sechzehnte, überarbeitete Auflage. München (C.H.Beck) 1996, S.63.
- 18) マリー・タクシス宛て1912年5月22日の書簡に次のようにある。「このように私の現在の生活の構成要素が集まってきました。それらを結びつけてくれる《精氣的な韌帯》を心待ちにしています。といたしますのも、目下それらすべて細紐で結わえてあるだけだからです」。Vgl. Rainer Maria Rilke und Marie von Thurn und Taxis: Briefwechsel. Erster Band. Neuausgabe der 1951 im Max Niemans Verlag AG, Zürich, und im Insel Verlag, Wiesbaden, erschienenen Ausgabe. Besorgt durch Ernst Zinn. Mit einem Geleitwort von Rudolf Kassner. Frankfurt am Main (Insel) 1986, S.158.
- 19) たとえば、リルケが妻クララに宛てた手紙の中には次のような文があった。「ゲーテとベッティーネ。2人に或る愛が育っていった。抑えようもなく、時機を逸することのない、まっとうな愛、まるで潮が満ちていくような、まるで高まりゆく年のような愛であった」(註10を参照)。ここにある「高まりゆく年」(das steigende Jahr)という言葉は、間テクスト性を考慮して初めてその豊かな意味内容が明らかになる。それは明らかにシュテファン・ゲオルゲの『魂の一年』の「悲しい舞曲」の中の一節の言葉から借用したものだからである。リルケは、妻クララとの間の共通知識を前提に、その詩篇の文脈を自分の書簡の文脈に取り込もうとしているのである。その一篇とは次のようなものである。Vgl. George, Stefan: Sämtliche Werke in 18 Bänden. Band IV. Stuttgart (Klett-Cotta) 1982, S.89.

Es lacht in dem steigenden Jahr dir
der Duft aus dem Garten noch leis.
Flicht in dem flatternden Haar dir
Eppich und Ehrenpreis.

Die wehende Saat ist wie Gold noch,
vielleicht nicht so hoch mehr und reich.
Rosen begrüßen dich hold noch,
ward auch ihr Glanz etwas bleich.

Verschweigen wir, was uns verwehrt ist;
geloben wir, glücklich zu sein,
wenn auch nicht mehr uns beschert ist
als noch ein Rundgang zu zwein.

高まりゆく年のなかで、君に
庭園の香りが、そっと微笑みかける。
風に舞い踊る君の髪に編み込んでごらん、
きづたとクワガタソウを。

風になびく麦の穂は黄金のようだ、
もうこれ以上に高く豊かに稔らないだろう
薔薇は君にまだ優しく会釈する、
その輝きはすこし色褪せはしたけれど。

僕らに拒まれているものについて語るのはやめよう。
幸せであると誓おう。
たとえ手を取りあって歩き回ること、
そのことより以上が許されないとしても。

- 20) 1914年6月9日ルー・サロメ宛て書簡や、同年6月13日マリー・タクシス宛書簡には、ベルクソンを読み進めていることへの喜びが吐露されている。そのときリルケが読んでいたベルクソンの著作は『物質と記憶』（1896年）と『創造的進化』（1907年）であり、それぞれ第8版と11版（どちらも1912年）であることが分かっている。Vgl. Rainer Maria Rilke / Lou Andreas-Salomé Briefwechsel. Herausgegeben von Ernst Pfeiffer. Frankfurt am Main (Insel) 1989, S.578f.
- 21) Rilke, Rainer Maria: Briefe an Baroness von OE. New York (Johannespresse) 1945, S.56.
- 22) Ebenda.
- 23) 「当時のゲーテはまだ相当に非近代的だった」以下の部分をMason（1958）は、Carl Sieberの1936年の雑誌論文 Rilkes äußerer Weg zu Goethe. In: Dichtung und Volkstum. Neue Folge des Euphion. Zeitschrift für Literaturgeschichte. Hrsg. von Julius Petersen und Hermann Pongs, 37. Band, 52頁の記述をそのまま用いている。しかしSieber（1936）の記述には一か所誤りがあり、それをMason（1958）はそのまま用いてしまっている。以下に原文を上げるが、誤りの部分については隔字体にしておく。Goethe war damals noch recht unmodern. Denn später scheint er wieder viel mehr Empfinden für "die Stimmung an sich" gehabt zu haben. 隔字体部分のwieder「再び」は正しくはmir「僕には」である。（付記：筆者は実際にマールバッハのドイツ国立文学資料館に保管されているリルケの書簡の手書き原資料で確認済みである）。
- 24) Rilke, Rainer Maria: Briefe an Baroness von OE. New York (Johannespresse) 1945, S.24.
- 25) Vgl. Rilke, Rainer Maria: Gesammelte Briefe in sechs Bänden. Hrsg. von Ruth Sieber-Rilke und Carl Sieber. Frankfurt am Main und Leipzig (Insel) 1937 (Reproduced in Kyoto 1977), S.27.
- 26) Vgl. Mason, Eudo C.: Rilke und Goethe. Köln und Graz (Böhlau) 1958, S.24.
- 27) Rilke, Rainer Maria: Briefe in zwei Bänden. Erster Band 1896 bis 1919. Herausgegeben von Horst Nalewski, Frankfurt a. M. (Insel) 1991, S.201.
- 28) Vgl. Mason, Eudo C.: ebenda.
- 29) Rilke, Rainer Maria: ibidem, S.137.

- 30) Ibidem, S.157.
- 31) ハロルド・ブルームの主張は、究極のところ「詩」と「批評」は同一のものであるということである。
 (「批評は散文詩／詩は韻文批評」というヒアスムスをブルームは持ち出している)。しかもそれら
 「詩＝批評」は決して認識論上のフィクションではなく、プラグマティックな、つまり現実世界にお
 いて生き延びるために繰り広げられる闘争そのものだと、ブルームは断言している。したがってそ
 こには客観性や真理の探究などではなく、むしろ嘘や欺瞞が満ち満ちている。結局、その「詩＝批
 評」に人々が注目するかどうかは、それが十分に強いかどうかの一点にかかっている。ただしそれ
 は単なる先行詩人や先行する言説へのゲリラ的な破壊活動ではない。先行するものの影響下におい
 て、それと戦い、あるいは弁護し、拒絶するといった、(嘘や欺瞞の)見かけの裏側では、自分自身
 と戦う弁証法的な闘争が繰り返し仕掛けられている。つまりブルームの言うアゴン(闘争)とは、
 究極には自分自身との戦い、生きるか死ぬかという極めてプラグマティックな自分との戦いである
 ということである。この観点からリルケの、ゲーテをめぐる嘘や、自己欺瞞は説明できるだろう。
 Vgl. Bloom, Harold: Agon. Towards a Theory of Revisionism. Oxford University Press 1982.
- 32) Rilke, Rainer Maria: ibidem, S.311.
- 33) Rilke, Rainer Maria: Sämtliche Werke. Hrsg. von Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-
 Rilke, besorgt durch Ernst Zinn. Bd.VI. Frankfurt a. M. (Insel) 1966, S.930f.
- 34) Rilke, Rainer Maria: ibidem, S.724f.
- 35) Ibidem, S.945.

〔付記〕 本論は、平成24年度～26年度 科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金 基盤研
 究 (C)「リルケとゲーテの連関に関する実証的・歴史的・哲学的研究」(研究代表者
 黒子康弘)による研究成果の一部である。

(くろご やすひろ 日本女子大学文学部史学科准教授)